



TITLE:

隋書經籍志序譯註(七)

AUTHOR(S):

興膳, 宏; 川合, 康三

CITATION:

興膳, 宏 ...[et al]. 隋書經籍志序譯註(七). 中國文學報 1980, 32: 116-134

ISSUE DATE:

1980-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177367>

RIGHT:

隋書經籍志序譯註 (七)

興膳宏

京都大學

川合康三

東北大學

集部

楚辭

楚辭者、屈原之所作也。⁽¹⁾自周室衰亂、詩人寢息、諂佞之道興、諷刺之辭廢。⁽⁴⁾楚有賢臣屈原、被讒放逐、乃著離騷八篇。⁽⁷⁾言己離別愁思、申杼其心、自明無罪、因以諷諫、冀君覺悟、卒不省察、遂赴汨羅死焉。⁽⁹⁾

弟子宋玉、痛惜其師、傷而和之。其後、賈誼、⁽¹¹⁾東方朔、⁽¹²⁾劉向、⁽¹⁴⁾揚雄、⁽¹⁵⁾嘉其文彩、擬之而作。

蓋以原楚人也、謂之楚辭。然其氣質高麗、雅致清遠、後之文人、咸不能逮。

始漢武帝命淮南王爲之章句、旦受詔、食時而奏之、其書⁽²⁰⁾亡。後漢校書郎王逸、集屈原已下、迄於劉向、逸又自爲一篇、并敍而注之、今行於世。⁽²¹⁾隋時有釋道騫、善讀之、能爲楚聲、音韻清切、至今傳楚辭者、皆祖騫公之音。

『楚辭』とは、屈原の作つたものである。周の王室が衰頹し、『詩經』の詩人のうたがえがやむと、阿諛追従が横行し、諷刺の文辭はすたれたのだった。楚の賢臣屈原は、讒言にあい國を追われて、『離騷』八篇を著した。その中で離別と悲愁を述べて、胸中を吐露し、自己の無罪を辯明しつつ、諷諫をおこない、君主が正しい道を悟ることを願ったが、結局省みられることなく、あげくに汨羅^{べいらか}に赴いて命を斷つたのである。

弟子の宋玉は、師を哀惜し、悲嘆をこめてそれに唱和した。その後、賈誼、東方朔、劉向、揚雄らが、その文彩のみごとに感服し、模擬の作品を著した。

思うに屈原は楚の人であるので、それを『楚辭』というのである。だがその個性は丈高い美しさにあふれ、雅趣は

清らかで奥深く、後世の文人たちには、誰も及びのつかないものであった。

はじめ漢の武帝が淮南王に命じてその「章句」を作らせ、それは朝に詔りを受けて、食事の時にはもう献上したというものであったが、その本は今はない。後漢の校書郎王逸は、屈原以下、劉向に至る作品を集め、王逸自身もさらに一篇をこしらえて、すべてに敍文を付けて注を施したが、それが今世に行なわれている。隋の時、釋道纂という者が、『楚辭』を読むことにすぐれ、楚の國の發音ができたが、その音聲の響きは至って清冽で、今に至るまで『楚辭』の傳承者たちは、みな騫公の音をうけついでいる。

『七略』と漢志には、文學作品を以て一部類を成す詩賦略があり、その中さらには五種に細分され、賦三種・雜賦・歌詩の順に並べられている。後序注(4)参照。但し賦三種が區分された基準はあまり明瞭でない。晉・荀勗と彼に次ぐ李充の四部目録では、第四の丁部に詩賦が收められ、他に圖讖と汲冢書が付せられていた。齊・王儉の『七志』になると、經典志・諸子志に次いで文翰志が七部の第三に配されて、『七略』の舊に復した。梁・阮孝緒の『七錄』は同じく七部分類により

隋書經籍志序註(4)(興膳・川合)

ながら、詩賦を録する文集録を第四に配している。内部は四類に分割され、楚辭部・別集部・總集部・雜文部の順で排列されるが、最後の雜文を除けば、名稱序列とも隋志と合致する。「雜文」は、『文心雕龍』雜文篇が設論・七・連珠を對象とすることから想像すれば、種々の雜多な文體を網羅した一類であつたろうか。然らば、それらは隋志では總集類に組みこまれている。以上總序(4)の(4)参照。隋志以降では、『唐六典』・新舊唐志など、名稱・構成すべて隋志に倣う。『日本國見在書目録』では、第三十八楚辭家以後、やはり別集家、惣集家の順に並ぶ。

「楚辭」は、『唐六典』卷十に、「以紀騷人怨刺」とある。

(1)

楚辭者二句 この句法は、王逸「離騷序」の「離騷經者、屈原之所作也」、あるいは班固「離騷贊序」の「離騷者、屈原之所作也」に似る。屈原を「離騷」の作者とするのは、『史記』屈原傳に始まるが、『楚辭』の名は同傳にはなく、酈吏列傳に「(朱) 賈臣以楚辭興(莊) 助俱幸」と見えるのがおそらく初出であろう。『漢書』には次の三例がある。地理志下に、「始楚賢臣屈原、被讒放流、作離騷諸賦以自傷悼。後有宋玉・唐勒之屬、慕而述之、皆以顯名。漢興、高祖王兄子濞於吳、招致天下之娛游子弟、枚乘・鄒陽・嚴夫子之徒、興於文景之際、而淮南王安亦都壽春、招賓客著書。而吳有嚴助・朱買臣、貴顯漢朝、文辭並發、故世傳楚辭」、朱買臣傳に、「會邑子嚴助貴幸、薦買臣。召見、說春秋、言楚詞、帝甚說之」、

王褒傳に、「宣帝時、修武帝故事、講論六藝羣書、博盡奇異之好、徵能爲楚辭九江被公、召見誦讀」とある。また王褒傳の記述に關連するものとしては、『七略』佚文『北堂書鈔』卷一百四十四酒食部粥・『太平御覽』卷八百五十九飲食部糜粥引に、「宣帝詔徵被公、見誦楚辭、被公年衰母老、每一誦、輒與粥」と見える。

(2) 自周室衰亂二句 「詩」の衰亡を記すことばを諸書から列舉する。『孟子』離婁下に、「王者之迹熄而詩亡、詩亡然春秋作」。漢志詩賦略序に、「春秋之後、周道寤壞、聘問歌詠、不行於列國、學詩之士、逸在布衣、而賢人失志之賦作矣」。班固「兩都賦序」(『文選』卷一)に、「昔成康沒而頌聲寢、王澤竭而詩不作」。皇甫謐「三都賦序」(『文選』卷四十五)に、「至于戰國、王道陵遲、風雅寥頓、於是賢人失志、辭賦作焉」。

「至手戰國、王道陵遲、風雅寥頓、於是賢人失志、辭賦作焉」。

(3) 諂佞之道興 王逸「楚辭章句敘」に、「其後周室衰微、戰國並爭、道德陵遲、譌詐萌生」とあるのが、同じ事態に對する共通の認識を示す。「諂佞」は、王褒「四子講德論」(『文選』卷五十一)が秦の世について、「連三王、背五帝、滅詩書、壞禮義、信任群小、憎惡仁智、詐僞者進達、佞諂者容入」というのが近からう。

(4) 諷刺之辭廢 「毛詩大序」に、「上以風化下、下以風刺上、主文而諷諫、言之者無罪、聞之者足以戒、故曰風」。鄭箋は、「風化風刺、皆謂譬喻不斥言也」と注する。釋文に、「下以

風、福鳳反」という如く、風は去聲に讀み、諷の意。

(5) 楚有賢臣屈原三句 『漢書』地理志下の「始楚賢臣屈原、被讒放流、作離騷諸賦以自傷悼」が最も近似する表現(注(1)参照)。屈原の廷臣としての事蹟と「離騷」創作の動機は、『史記』本傳に詳しい。「屈原者、名平、楚之同姓也。爲楚懷王左徒。博聞彊志、明於治亂、嫺於辭令。入則與王圖議國事、以出號令、出則接遇賓客、應對諸侯。王甚任之。上官大夫與之同列、爭寵而心害其能。懷王使屈原造爲憲令、屈平屬草稿、未定。上官大夫見而欲奪之、屈平不與、因讒之曰、王使屈平爲令、衆莫不知、每一令出、平伐其功、以爲非我莫能爲也。王怒而疏屈平。屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷」。王逸「離騷敘」にも、ほぼ同趣旨のことを記す。王逸によれば、上官大夫の名は靳尚。

(6) 離騷八篇 王逸「楚辭章句」は、『楚辭』諸篇のうち、離騷・九歌・天問・九章・遠遊・卜居・漁父・大招の八篇を屈原の作とするが、大招のみは「或曰景差、疑不能明也」と付記して、判断を留保する。『史記』本傳の論贊には、「余讀離騷・天問・招魂・哀郢、悲其志」とあるから、司馬遷はこれらの篇を屈原の作とみていたらしい。招魂は、王逸によれば宋玉の作。

(7) 言己離別愁思七句 王逸「楚辭章句敘」に、「屈原履忠被譖、憂悲愁思、獨依詩人之義而作離騷、上以諷諫、下以自慰。遭時闇亂、不見省納、不勝憤懣、遂復作九歌以下凡二十五篇」

とあり、また「離騷敘」には、「屈原執履忠貞而被讒害、憂心煩亂、不知所愬、乃作離騷經。離、別也。騷、愁也。經、徑也。言已放逐離別、中心愁思、猶依道徑、以風諫君也。故上述唐虞三后之制、下序桀紂羿澆之敗、冀君覺悟、反於正道而還己也。是時秦昭王使張儀諂詐懷王、令絕齊交、又使誘楚、請與俱會武關。遂脅與俱歸、拘留不遣、卒客死於秦。其子襄王復用讒言、遷屈原於江南。屈原放在草野、復作九章、援天引聖、以自證明、終不見省、不忍以清白久居濁世、遂赴汨淵自沈而死」とある。王逸は「離騷」の名稱を「離別愁思」の意に解したが、これは『史記』の「離騷者、猶離憂也」や、班固「離騷贊序」の「離、猶遭也。騷、憂也」とはちがった解釋になっている。

(8) 申杼其心 「申杼(杼)」は、おそらく申敘の意であろう。『世說新語』尤悔篇に、「桓宣武對簡文帝不甚得語、廢海西後、宜自申敘、乃豫撰數百語、陳廢立之意」の例がある。

(9) 汨羅 『漢書』地理志下によれば、長沙國十三縣の二に羅縣がある。その注に、「應劭曰、楚文王徙羅子、自枝江居此。師古曰、盛弘之荊州記云、縣北帶汨水、水原出豫章艾縣界、西流注湘。汨汨西北去縣三十里、名爲屈潭、屈原自沉處」という。また『水經注』卷三十八湘水に、「汨水又西爲屈潭、即汨羅淵也。屈原懷沙、自沈于此、故淵潭以屈爲名。昔賈誼史遷、皆嘗逕此、弭櫂江波、投弔于淵。淵北有屈原廟、廟前有碑」とある。

隋書經籍志序譯註(4) (興膳・川合)

(10) 弟子宋玉三句 宋玉についての最も早い記述は、『史記』

屈原傳の「屈原既死之後、楚有宋玉・唐勒・景差之徒者、皆好辭而以賦見稱。然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫」である。また注(1)に引く『漢書』地理志にも名が見える。彼を屈原の弟子とするのは王逸の説。「九辯敘」に、「宋玉者、屈原弟子也。閔惜其師忠而放逐、故作九辯以述其志」。王逸が宋玉の作に擬する篇は、「九辯」の他に「招魂」がある。漢志には「宋玉賦十六篇」と著録され、原注に「楚人、與唐勒並時、在屈原後也」という。本志では、次の別集類に「楚大夫宋玉集三卷」と著録されている。『韓詩外傳』『新序』等に彼をめぐる逸話があるが、その生涯はほとんどよくわからない。

(11) 賈誼 (前二〇一—前一九九)、洛陽の人。『史記』卷八十四に、屈原との合傳を有する。漢の文帝の時代、法律・制度の改革に意欲を燃やしたが、重臣たちに憎まれて、遠く長沙王の太傅に左遷された。湘江を渡るに及んで、昔時の屈原の不幸を我が身に思いくらべて、「弔屈原賦」を作り、江に投じた。王逸によれば、「惜誓」の作者に擬せられることもあった。傳は『史記』のほか、『漢書』卷四十八にもある。

(12) 東方朔 (前一五四—前九三)、字は曼倩、平原厭次の人。武帝に仕えた滑稽の雄として名高いが、また文辭を善くし、「答客難」「非有先生論」が傳わる。『楚辭』の「七諫」は、彼の作といわれる。王逸「七諫敘」に、「東方朔追愬屈原、故作此辭以述其志、所以昭忠信、矯曲朝也」という。傳は

『漢書』卷六十五にある。

- (13) 劉向 (前七七—前六)、經學・目錄學等に關する業績は各所に既出。『楚辭』のうち、「九歎」が彼の作とされる。王逸「九歎敘」に、「向以博古敏達、典校經書、辯章舊文。追念屈原忠信之節、故作九歎。歎者、傷也、息也。言屈原放在山澤、猶傷念君、歎息無已。所謂讀賢以輔志、騁詞以曜德者也」。傳は『漢書』卷三十六。

- (14) 揚雄 (前五三—後一八)、字は子雲、蜀郡成都の人。司馬相如と並稱される辭賦の大家。「離騷」を讀んで屈原の境遇に同情しつつも、その自ら命を斷つた行爲をあまりにも狷介として反駁し、「反離騷」を著わして、岷山から江に投じ、屈原を弔った。その全文が『漢書』卷八十七の本傳に收められる。さらに「離騷」に倣った「廣騷」、「九章」の惜誦から懷沙に至る諸篇に倣った「畔牢愁」の作もあったが、傳わらない。

- (15) 嘉其文彩二句 王逸「楚辭章句敘」に、「自終沒以來、名儒博達之士、著造詞賦、莫不擬則其儀表、祖式其模範、取其要妙、竊其華藻」とあり、「九思敘」にも、「至劉向・王褒之徒、咸嘉其義、作賦騁辭、以讀其志」とある。

- (16) 謂之楚辭 『楚辭』の名稱については、注(1)参照。
(17) 氣質高麗 「氣質」は、ここでは個性、持ちまへの意であろう。「高麗」は、『宋書』謝惠連傳に、「又爲雪賦、亦以高麗見奇」、『詩品』中品の張翰・潘尼評に、「季鷹黃華之唱、

正叔綠縈之章、雖不具美、而文彩高麗」などの例がある。「九思敘」に、「自屈原終沒之後、忠臣介士遊覽學者、讀離騷九章之文、莫不愴然、心爲悲感、高其節行、妙其麗雅」というのも参照。

- (18) 雅致清遠 「雅致」の例は、袁宏「三國名臣序贊」『文選』卷四十七)に、「名節殊塗、雅致同趣」、『世說新語』言語篇に、「裴僕射善談名理、混混有雅致」、『詩品』下品謝超宗等評に、「檀謝七君、並祖襲顏延、欣欣不倦、得士大夫之雅致乎」などと見える。「清遠」も評語としてよく用いられ、『世說』德行篇に、「太保居在正始中、不在能言之流、及與之言、理中清遠」、『詩品』中品嵇康評に、「然託喻清遠、良有鑒裁、亦未失高流矣」とある。

- (19) 後之文人二句 同趣旨の論に、『文心雕龍』辨騷篇の「自九懷以下、遽躡其跡、而屈宋逸步、莫之能追」があげられよう。

- (20) 始漢武帝命淮南王爲之章句四句 淮南王は、劉安(前一七九—前一二二)。文帝の弟劉長の子で、武帝には大叔父になる。『漢書』卷四十四の傳に、「使爲離騷傳、且受詔、日食時上」とある。また「楚辭章句敘」に、「至於孝武帝、恢廓道訓、使淮南王安作離騷經章句、則大義粲然。後世雄俊、莫不瞻慕、舒肆妙慮、續述其詞」。

- (21) 後漢校書郎王逸六句 王逸、字は叔師、南郡宜城の人。校書郎を経て、順帝(在位一二六—一四四)の時に侍中となつ

た。『後漢書』文苑傳上に、「著楚辭章句、行於世」とある。本志目錄に、「楚辭十二卷、并目錄、後漢校書郎王逸注」と著録されるのがそれ。『楚辭章句』は、屈原の「離騷」から劉向の「九歎」に至る十六篇の他に、自作の「九思」を付して十七卷とする。彼の敘によれば、十六卷の構成は劉向を次ぐもの。「逮至劉向、典校經書、分爲十六卷。孝章即位、深弘道藝、而班固・賈逵復以所見、改易前疑、各作離騷經章句、其餘十五卷、闕而不說。又以壯爲狀、義多乖異、事不要括。今臣復以所識所知、稽之舊章、合之經傳、作十六卷章句。雖未能究其微妙、然大指之趣、略可見矣」。また「九思敘」には、「九思者、王逸之所作也。逸南陽人、博雅多覽、讀楚辭而傷感屈原、故爲之作解」という。

(2) 隋時有釋道騫六句 道騫について、『續修四庫全書提要』及び周祖謨「騫公楚辭音之協韻說與楚音」(『問學集』上冊所收)は、『續高僧傳』卷三十に見える智騫のこととする。「時慧日沙門智騫者、江表人也。偏洞字源、精閑通俗、晚以所學、追入道場。自祕書正字讎校著作、言義不通、皆諮騫決。既爲定其今古、出其人世、變體詰訓、明若面焉。每曰、余字學頗周、而不識字者多矣、無人通決、以爲恨耳。造衆經音及蒼雅字苑、宏敘周瞻、達者高之」(大正大藏經卷五十一・七〇四b c)。道騫の書は、本志目錄に、「楚辭音一卷、釋道騫撰」とあるのがそれ。朱熹「楚辭集注序」に、「又有僧道騫者、能爲楚聲之讀、今亦漫不復存、無以考其說之得失」という如

隋書經籍志序譯註(4) (興膳・川合)

く、南宋のころすでに失われていたらしい。然るに近代に至り、敦煌文書中に『楚辭音』殘卷八十四行(Pelliot, 2494)の存することがわかった。前掲『續修四庫全書提要』並びに王重民『敦煌古籍敘錄』卷五參照。

(23) 音韻清切 『文心雕龍』聲律篇に、「又詩人綜韻、率多清切、楚辭辭楚、故訛韻實繁」とあるのを參照。

別 集

(1) 別集之名、蓋漢東京之所創也。(2) 自靈均已降、屬文之士衆矣、然其志尚不同、風流殊別。(4) 後之君子、欲觀其體勢、而見其心靈、故別聚焉、名之爲集。(7) 辭人景慕、並自記載、(8) 以成書部。年代遷徙、亦頗遺散、其高唱絕俗者、略皆具存。今依其先後、次之於此。

別集という名稱は、後漢の時に作られたものであろう。屈原以來、詩文を作る人の數が増えたが、その志向はさまざまであり、その風格もとりどりであった。後代の讀書人は、文章のありさまを通して作者の心情をみようとして、個人「別」に作品をまとめ、「集」と名づけたのである。

文人たちはそれを慕って後を追ひ、みなそれぞれに集の名を付け加えていったので、一つの部類ができあがることになった。時代の推移につれて、散佚したのもかなりあるが、卓越した非凡な作品は、ほぼみな現存している。今、時代の前後に従つて、ここに配列する。

- (1) 「別集」は、『唐六典』卷十に、「以紀詞賦雜論」とある。別集之名二句 この記述については、『四庫全書總目提要』

の説が自ずと解説の役割をはたしている。「集、始於東漢、荀況諸集、後人追題也。其自製名者、始於張融玉海集。其區分部帙、則江淹有前集、有後集。梁武帝有詩賦集、有文集、有別集。梁元帝有集、有小集。謝朓有集、有逸集。與王筠之一官一集、沈約之正集百卷、又別選集略三十卷者、其體例均始於齊梁。蓋集之盛、自是始也。本文の「別集之名、蓋漢東京之所創也」も本意は、「個人の集が編まれるようになったのは東漢に始まる」ことをいうにあるとすべきで、「別集」の名稱がこの時期に始まったということではあるまい。目錄學上の用語としての「別集」が現われるのは、いま明らかな限りでは『七錄』が最初で、「總集」の「總」に對應しての「別」と思われる。本志目錄に見える「梁武帝別集目錄」の例も、ほぼ同時代のものといえる。

前漢の文人、たとえば司馬相如・揚雄等のさまざまな作品が

一つの文集に編まれたことを示唆する記述は、『史記』『漢書』には見られない。ところが『後漢書』になると、たとえば蔡邕傳の「所著詩・賦・碑・誄・銘・讚・連珠・箴・弔・論・義・獨斷・勸學・釋詁・敘樂・女訓・篆・祝文・章表・書記、凡百四篇、傳於世」のように、全著述が一まとまりの書として編まれていたことを窺わせるような文章が珍しくない。『三國志』魏書曹植傳所載の明帝景初中詔には、「撰錄植前後所著賦・頌・詩・銘・雜論、凡百餘篇、副藏内外」とあつて、いっそう明瞭に一個人の文集編纂事業の行なわれた事實を示している。またそれに先だつて、徐幹・陳琳・應瑒・劉楨等の没後、文帝が「其の遺文を撰し、都べて一集と爲した（與吳質書）」というの、文集の編纂という點では近い意義を持つ。

- (2) 自靈均以降 「靈均」は、屈原のこと。「離騷」に、「皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名。名余曰正則兮、字余曰靈均」とある。屈原を以て歷代文人の祖と見なす認識は、沈約「宋書」謝靈運傳論の「自靈均以來、多歷年代」などにも窺える。
- (3) 志尚不同 阮籍「詠懷詩」其十五に、「昔年十四五、志尚好書詩」。

- (4) 風流殊別 「風流」は、文學の趣き、傾向をいうのであらう。「宋書」謝靈運傳論に、「周室既衰、風流彌著」。「詩品」序に、「大康中、三張二陸兩潘一左、勃爾俱興、鍾武前王、風流未沫、亦文章之中興也」。

- (5) 觀其體勢 「體勢」は、文學についての個性や作風を指す。

『文心雕龍』定勢篇に、「夫情致異區、文變殊術、莫不因情立體、即體成勢也。勢者、乘利而爲制也。如機發矢直、澗曲湍回、自然之趣也。圓者規體、其勢也自轉、方者矩形、其勢也自安。文章體勢、如斯而已。」

(6) 見其心靈 經部詩序に、「詩者、所以導達心靈、歌詠情志者也」とある。同注(1)參照。

(7) 辭人景慕 漢志詩賦略序に、「是以揚子梅之曰、詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫」とあり、顏師古注は、「辭人、言後代之爲文辭」という。六朝の文學論でも、沈約『宋書』謝靈運傳論の「自漢至魏、四百餘年、辭人才子、文體三變」などと頻用される。「景慕」は、史部雜史序に、「是後羣才景慕、作者甚衆」と既出。

(8) 以成書部 「書部」は、總序(四)に、「又以東觀及仁壽閣集新書、校書郎班固・傅毅等典掌焉。並依七略而爲書部、固又編之、以爲漢書藝文志」と既出。

(9) 其高唱絕俗者 陸機『演連珠』其二十三(『文選』卷五十五)に、「臣聞、絕節高唱、非凡耳所悲、肆義芳訊、非庸聽所善」とある。

總 集

總集者、以建安之後、辭賦轉繁、衆家之集、日以滋廣、⁽¹⁾
晉代摯虞、苦覽者之勞倦、於是採擷孔翠、芟剪繁蕪、自詩⁽²⁾

隋書經籍志序譯註(興膳・川合)

賦下、各爲條貫、合而編之、謂爲流別。⁽⁵⁾是後文集總鈔、作者繼軌、屬辭之士、以爲覃奧、而取則焉。⁽⁶⁾今次其前後、并⁽⁷⁾
解釋評論、總於此篇。⁽⁸⁾

總集とは、建安以後、文學がますますさかになり、諸家の別集が、日増しにふえていく中で、晉の摯虞が、讀者の勞苦を思いやり、數多の作品から精華を選び出して、蕪雜なものを切り捨て、詩賦以下、それぞれジャンルごとに分かち、それを一書にまとめて、『流別集』と名づけた。このうち文集・詞華集は、あいついで作られ、詩文の作者たちはそれに深く心を引かれて、規範としたのであった。今、時代の順に並べ、解釋・評論をそれに合わせて、この篇に一括する。

「總集」は、『唐六典』卷十に、「以紀類分文章」とある。

(1) 自總集者至謂爲流別 總集の起源とその意義に關しては、『四庫全書總目提要』總集類の序が、本序の意を補って次のようにいう。「文籍日興、散無統紀、於是總集作焉。一則網羅放佚、使零章殘什、竝有所歸。一則刪汰繁蕪、使秀稗咸除、

菁華畢出。是固文章之衡鑒、著作之淵藪矣。三百篇既列爲經、王逸所哀、又僅楚辭一家、故體例所成、以摯虞流別爲始。其書雖佚、其論尙散見藝文類聚中、蓋分體編錄者也。

(2) 晉代摯虞 摯虞については、史部地理序注(9)参照。

(3) 採摭孔翠 「孔翠」は、左思「蜀都賦」(『文選』卷四)に、「孔翠群翔、犀象競馳」とあり、劉淵林は「孔、孔雀也。翠、翠鳥也」と注する。

(4) 芟剪繁蕪 『後漢書』鄭玄傳論に、「鄭玄括囊大典、網羅衆家、刪裁繁誣(蕪)、刊改漏失」、「文心雕龍」總術篇に、「博者該瞻、蕪者亦繁」。同鎔裁篇贊に、「芟繁剪穢、弛於負擔」、「詩品」上品謝靈運評に、「頗以繁蕪爲累」などの例がそれぞれ見える。

(5) 各爲條貫 「條貫」は、體系を整えること。『文心雕龍』鎔裁篇に、「故能首尾圓合、條貫統序」、また序志篇に、「割情析采、籠圈條貫」とある。『文章流別集』の場合に即していえば、各種の文章をジャンル別に分けてまとめることをいうのであろう。

(6) 謂爲流別 『晉書』摯虞傳に、「又撰古文章、類聚區分爲三十卷、名曰流別集、各爲之論、辭理愜當、爲世所重」とある。これによれば、『流別集』は各ジャンルの精華をすぐった詞華集の部分と、それぞれの種別ごとに付された論の部分とから成っていたらしい。目録に見える『文章流別集』四十一卷(梁六十卷、志二卷、論二卷)は、そうした書であった

ろう。のちに論の部分だけが獨立して行なわれたらしく、本志に著録される『文章流別志論』二卷がそれである。後者はさらに志と論の兩部から構成されていたようであり、志はやはり摯虞の著になる『文章志』(史部簿錄類)とほぼ同じく、歷代文人の略傳を内容としたように推測される。『流別集』、『流別志論』とも佚書だが、類書等に引かれる論の佚文は、嚴可均『全晉文』卷八十七・許文雨『文論講疏』(一九三七年初版)に輯められている。以上、より詳しくは興膳「摯虞文章流別志論攷」(『入矢・小川教授退休記念論文集』一九七四年)を参照されたい。

(7) 是後文集總鈔五句 總鈔の「鈔」は、大部な作品集からさうによりすぐった選本を意味する。本志目録に即して見れば、劉義慶撰『集林』一百八十一卷について『集林鈔』十一卷が、殷淳撰『婦人集』二十卷について『婦人集鈔』二卷が、謝靈運撰『賦集』九十二卷について『賦集鈔』一卷が、同『詩集』五十卷について『詩集鈔』十卷が存在した如くである。

摯虞の『流別集』『流別志論』は、のちの評者から概して好意的な評價を受けている。以下に諸家の評を紹介しておく。「摯虞文論、足稱優洽」(顏延之「庭詒」)、『太平御覽』卷五百八十六文部詩引。「摯虞述懷、必循規以溫雅、其品藻流別、有條理焉」(『文心雕龍』才略篇)、「流別精而少巧、翰林淺而寡要」(同序志篇)、「摯虞文志、詳而博瞻、頗曰知言」(『詩品』序)。「摯虞之文章志、區別優劣、編緝勝辭、亦才

人之苑囿」(劉善經『四聲指歸』、『文鏡秘府論』天卷引)。

(8) 作者繼軌 「繼軌」は、總序(四)に「明・章繼軌、尤重經術」として既出。劉現「勸進表」(『文選』卷三十七)に、「世祖武皇帝、遂造區夏、三葉重光、四聖繼軌」の例があり、李注は「廣雅」を引いて、「軌、跡也」という。

(9) 以爲覃奧 「覃奧」は、郭璞「爾雅序」が「爾雅」について、「學覽者之潭奧、摘翰者之華苑也」というのを参照。

(10) 并解釋評論 「解釋」は、蕭該『文選音』三卷、孫愷注『洛神賦』一卷、沈約注『梁武連珠』一卷の類を、また「評論」は、『流別志論』のほか、李充『翰林論』三卷、劉勰『文心雕龍』十卷、鍾嶸『詩評』(あるいは『詩品』)三卷の類をそれぞれ指す。

後 序

文者、所以明言也。⁽¹⁾ 古者登高能賦、山川能祭、師旅能誓、喪紀能誄、作器能銘、則可以爲大夫。言其因物騁辭、情靈無擁者也。⁽⁵⁾ 唐歌・虞詠、商頌・周雅、敘事緣情、紛綸相襲、自斯已降、其道彌繁。⁽⁷⁾

世有澆淳、時移治亂、文體遷變、邪正或殊。⁽⁸⁾ 宋玉・屈原、激清風於南楚、嚴・鄒・枚・馬、陳盛漢於西京、平子豔發於

隋書經籍志序譯註(代) (興膳・川合)

東都、王粲獨步於漳・滏。⁽¹³⁾ 爰逮晉氏、見稱潘・陸、並黼藻相輝、宮商間起、清辭潤乎金石、精義薄乎雲天。⁽¹⁷⁾ 永嘉已後、玄風既扇、辭多平淡、文寡風力。降及江東、不勝其弊。

宋・齊之世、下逮梁初、靈運高致之奇、延年錯綜之美、謝玄暉之藻麗、沈休文之富溢、煇煥斌蔚、辭義可觀。⁽²¹⁾ 梁簡文之在東宮、亦好篇什、清辭巧製、止乎枉席之間、彫琢蔓藻、思極閨闈之內。後生好事、遞相放習、朝野紛紛、號爲宮體。流宕不已、訖于喪亡。陳氏因之、未能全變。⁽²⁴⁾

其中原則兵亂積年、文章道盡。⁽²⁵⁾ 後魏文帝、頗效屬辭、未能變俗、例皆淳古。齊宅漳濱、辭人間起、高言累句、紛紜絡繹、清辭雅致、是所未聞。⁽²⁸⁾ 後周草創、干戈不戢、君臣戮力、專事經營、風流文雅、我則未暇。⁽³⁴⁾ 其後南平漢・沔、東定河朔、訖于有隋、四海一統、采荆南之杞梓、收會稽之箭竹、辭人才士、總萃京師。屬以高祖少文、煬帝多忌、當路執權、逮相擠壓。於是握靈蛇之珠、輒荆山之玉、轉死溝壑之內者、不可勝數、草澤怨刺、於是興焉。⁽⁴¹⁾

古者陳詩觀風、斯亦所以關乎盛衰者也。班固有詩賦略、凡五種、今引而伸之、合爲三種、謂之集部。⁽⁴⁴⁾

「文」とは、言語を明確に示すためのものである。そのかみ、丘に登って詩を賦することができ、山川の神々を祭る文を作ることができ、いくさに臨んで誓言をなすことができ、喪に際して誄を書くことができ、できあがった器物に銘を作ることが出来る者、そうした人物は大夫の列に連なることができた。対象に基づいて文章を思うままに操り、精神をとどこおりなく流露させうる者をいうのである。堯や舜の歌、商頌・周雅、事を述べるものも感情をうたうものも、次々に踏襲されて、これより以降、その方面はますます盛んになった。

世に盛衰が生じ、時代に治亂の變化がおこると、文學の傾向もそれにつれて變遷して、正統と異端のちがいが現われた。屈原・宋玉は南方楚の國で清風を卷き起こし、嚴忌・鄒陽・枚乘・司馬相如は、前漢の世に豐饒な文藻を繰り広げ、張衡は後漢の時に華麗さを發揮し、王粲は魏の時代の傑出した存在であった。晉の世になると、潘（岳）・陸（機）が並稱され、あてやかな文彩が輝きあって、宮商の音色が時に湧き起こり、清冽な文辭は金石の樂の音と調和して、精

緻な内容は高らかに天空に迫った。永嘉以後は、玄學の風潮が高まったため、平淡な措辭が多くなり、文章にたくましい生命力が乏しくなった。東晉に至ると、文學の疲弊はいかんともしがたいものになった。

宋・齊の世から、梁初に至るまでの間では、謝靈運の高邁な獨創性、顏延之の複雑な美しさ、謝朓の華麗な文飾、沈約の溢れんばかりの豐饒さ、それらはきらびやかにはなやぎ、表現・内容ともみるに足るものであった。梁の簡文帝は東宮時代、やはり詩文を愛好したが、きれいで達者な作品も、男女のことに視野が限られ、裝飾をこらした辭句も、しよせん閨房の外に出るものではなかった。若い世代はかかる趣きを好み、つぎつぎ模倣して、宮廷の内外でしきりに同趣の作品が作られ、それは「宮體」とよばれた。文學はするするその傾向に押し流されて、國の滅亡まで續いたのであった。陳はそれを受け継ぎ、完全に改めることはできなかった。

一方、中原はいえは多年戰亂が續き、文學の方面はすたれていた。北魏の孝文帝は、いささか文章の心得があっ

たが、當時の風潮を變革することはできず、おおむねすなおで古風な作風であった。北齊は漳河のほとりに都を定めて、文人もままあらわれたが、高い調子の長々とした論文は、なかなか盛んだったものの、清らかでみやびな文學は、きかれることがなかった。北周の草創期は、兵亂が収まらず、君臣は力をあわせて、國家經營に専念したため、風流文雅については、まだそのゆとりがなかった。その後、周は南は漢水、汧水の一帯を制壓し、東は河北の地を平定して、隋王朝に至り、天下が一つに統合されると、あたかも荆南の良材・會稽の美竹を中央に集めるように、各地の文人才子が、首都に勢揃いしたのであった。あいにく隋の高祖は無教養、煬帝は嫉妬深い人物であったので、要路の權力者たちが、壓迫排斥をこととするという事態になった。そのため靈蛇の珠を擁し、荆山の玉を抱く文才の持ち主が、窮境に陥って野垂れ死した例は、枚舉にたえず、野に埋もれた人々の間から怨念と批判の文學が、湧き起こったのであった。

いにしえは詩を並べつらねてそこに各地の氣風をよみと

隋書經籍志序評註代（興膳・川合）

ったが、それも文學が世の盛衰を反映するものであるからである。班固は「詩賦略」を著して、すべて五種にまとめたが、ここではそれから展開して、合わせて三種とし、これを集部という。

集部の後序は、これまでの經史子三部のそれとはいささか趣きを異にして、古代から隋に至る文學史の概観を行なったものになっている。正史中にこうした内容の文學論が置かれるのは、沈約の『宋書』謝靈運傳論以來のことであり、この序でもしばしば沈約の論が意識されている。『隋書』では、他に卷七十六文學傳にも、文學史の視點から書かれた序が冠されている。「志」の部分は本來獨立して編まれたものとはいいながら、一つの正史に相似した二篇の論が存するのは異例なことである。

- (1) 文者二句 『左傳』襄公二十五年の「仲尼曰、志有之、言以足志、文以足言。不言、誰知其志。言之無文、行而不遠」を意識して書かれているよう。「明言」は、劉琨「答盧諶詩」『文選』卷二十五)に、「文以明言、言以暢神」とある。
- (2) 古者登高能賦六句 『詩』鄘風「定之方中」の毛傳に、「故建邦能命龜、田能施命、作器能銘、使能造命、升高能賦、師旅能誓、山川能說、喪紀能誄、祭祀能語、君子能此九者、可謂有德音、可以爲大夫」とあるのにもとづく。漢志詩賦略序

には、「傳曰、不歌而誦、謂之賦、登高能賦、可以爲大夫、言感物造端、材知深美、可與圖事、故可以爲列大夫也」とある。『文心雕龍』詮賦篇にも「傳曰、登高能賦、可爲大夫」の句がある。

- (3) 因物騁辭 皇甫謐「三都賦序」「文選」卷四十五に、「古人稱不歌而頌、謂之賦。然則賦也者、所以因物造端、敷弘體理、欲人不能加也」とある。注②に引く漢志の「感物造端(端)」の句について、顏師古注が「因物動志、則造辭義之端緒」というのを并せ参照。また『文心雕龍』詮賦篇は「登高能賦」の句を分析して、「原夫登高之旨、蓋覩物興情。情以物興、故義必明雅、物以情觀、故詞必巧麗」という。「因物」は、『尚書』君陳に、「惟民生厚、因物有遷」。「騁辭」は、班固「答賓戲」(『漢書』卷一百上・「文選」卷四十五)に、「亡命漂説、騁旅騁辭」、孔融「薦禰衡表」に、「飛辯騁辭、溢氣全涌」の例がある。楚辭注④にも既出。

- (4) 情靈無擁 「情靈」は、「心靈」にはほ同じであろう。蕭子良「與中丞孔稚珪釋疑惑」(『弘明集』卷十一、大正藏五十二・七二c)に、「璧有待之參差、足見情靈之乖舛矣」、沈約「神不滅論」(『廣弘明集』卷二十二、大正藏五十二・二五三c)に、「何則情靈淺弱、心慮雜擾」の例が見える。「無擁」の「擁」は、「壅」に同じ。『左傳』成公十二年に、「交贊往來、道路無壅」とある。

- (5) 唐歌虞詠二句 『文心雕龍』明詩篇に、「至堯有大唐之歌、

舜造南風之詩、觀其二文、辭達而已。……自商暨周、雅頌圓備、四始彪炳、六義環深」とある。うち「唐歌」については、『尚書大傳』虞夏傳に、「還歸二年、謗然乃作大唐之歌。樂曰、舟張辟雍、鴈鶴相從、八風回回、鳳皇啾啾」と見え、鄭玄は堯の禪讓を美めた歌と注する。また「虞詠」は、『禮記』樂記に、「昔者舜作五弦之琴、以歌南風」とあるのがそれ。『尸子』や『孔子家語』にその歌詞と稱されるものが見える。因みに駱賓王「和道士閻情詩啓」の「竊惟詩之興作、兆基遠古。唐歌虞詠、始載典謨、商頌周雅、方陳金石」は、隋志の筆調を模したものかもしれない。

- (6) 敘事緣情 「敘事」は、『文心雕龍』誄碑篇に、「其敘事也該而要、其綴采也雅而澤」、また哀弔篇に、「觀其慮善辭變、情洞悲苦、敘事如傳」等の例がある。「緣情」は、陸機「文賦」(『文選』卷十七)の「詩緣情、而綺靡、賦體物而瀏亮」による。李善注に、「詩人言志、故曰緣情、賦以陳事、故曰體物」。

- (7) 自斯已降二句 『宋書』謝靈運傳論に、「自茲以降、情志愈廣」。

- (8) 世有澆淳 『莊子』繕性篇に、「及唐虞始爲天下、興治化之流、淥淳散朴、離道以善、險德以行」。釋文に、「淥、古堯反、本亦作澆」という。『漢書』循吏黃霸傳の「務相增加、澆淳散朴」はこれにもとづく。顏師古注に、「不難爲淳、以水澆之、則味漓薄」とある。本文ではこの二例の如く「澆」

を動詞に讀むのではなく、「澆淳」と並置の關係に解すべきである。

- (9) 文體選變 時代に伴う文學の變遷を説く指摘は、隋志に先行する以下の諸書に見られる。沈約『宋書』謝靈運傳論に、「自漢至魏、四百餘年、辭人才子、文體三變」。『文心雕龍』時序篇に、「故知歌謠文理、與世推移、風動於上、而波震於下者」、また「故知文變染乎世情、興廢繫乎時序、原始以要終、雖百世可知也」。『文選』序に、「蓋踵其事而增華、變其本而加厲、物既有之、文亦宜然、隨時變改、難可詳悉」。『隋書』文學傳序は、これらの指摘をふまえて、「自漢魏以來、迄乎晉宋、其體屢變、前哲論之詳矣」と述べる。

- (10) 宋玉屈原二句 『宋書』謝靈運傳論に、「周室既衰、風流彌著、屈平・宋玉、導清源於前、賈誼・相如、振芳塵於後」。『文心雕龍』時序篇にも、「屈平・聯藻於日月、宋玉・交彩於風雲」と並稱される。「清風」も、同篇に「故稷下扇其清風、蘭陵鬱其茂俗」と見える。

- (11) 嚴鄭枚馬二句 『漢書』司馬相如傳に、「會景帝不好辭賦、是時梁孝王來朝、從游說之士齊人鄒陽・淮陰枚乘・吳嚴忌・夫子之徒、相如見而說之」とある。また注(9)に引く謝靈運「擬魏太子鄴中集詩序」に、「鄭・枚・嚴・馬」と見える。「盛藻」は、陸機「文賦」序に、「故作文賦、以述先士之盛藻、因論作文之利害所由」、『宋書』謝靈運傳論に、「二祖・陳王、咸著盛藻」などと用いられている。

隋書經籍志序譯註(4) (興膳・川合)

- (12) 平子豔發於東都 『宋書』謝靈運傳論の「若夫平子豔發、文以情變、絕唱高蹤、久無嗣響」にもとづく表現。

- (13) 王粲獨步於漳滏 曹植「與楊德祖書」(『文選』卷四十二・「三國志」魏書曹植傳裴注)に、「昔仲宣獨步於漢南、孔璋鷹揚於河朔」とあるのを模したものの。但し原據の曹植書にいう「漢南」は、王粲(一七七―二一七)が長安を逃れて身を寄せた荊州を指すのに對し、「漳滏」は魏の都鄴の近郊を流れる河、すなわち鄴をいいかえた表現。左思「魏都賦」(『文選』卷六)に、「北臨漳滏、則冬夏異沼」とあり、李善注に、「漳滏、二水名、經鄴西北。滏水熱、故曰滏口」という。また『水經注』卷十漳水の條に、「漳水又北、滏水入焉」とある。

- (14) 爰逮晉氏六句 西晉の文學を潘岳(二四七―三〇〇)・陸機(二六一―三〇三)によって代表させる見解は、夙に『宋書』謝靈運傳論に見える。「降及元康、潘・陸特秀、律異班・賈・體變曹・王、綱旨星稠、繁文綺合。綴平臺之逸響、採南皮之高韻、遺風餘烈、事極江右」。李注に引く『續晉陽秋』にも、「逮乎西朝之末、潘・陸之徒有文質、而宗師不異」という。梁の文學論では、裴子野「雕蟲論」(『通典』卷十六選舉・「文苑英華」卷七百四十二)に、「其五言爲家、則蘇・李自出、曹・劉偉其風力、潘・陸固其枝葉、蕭子顯「南齊書」文學傳論に、「潘・陸齊名、機・岳之文永異」とある。潘・陸の文學の特質を華麗さにあるとする考えは、『世說新語』文學篇の「潘

文爛若披錦、無處不善、陸文若排沙擲金、往往見寶」や『詩品』上品潘岳評の同趣旨の記述にも示される。

(15) 鮑藻相輝 「鮑」は、禮服に刺繡されるおののよう、

「斧」に同じ。『法言』學行篇に、「吾未見好斧藻其德、若斧藻其業者也」とある。『文心雕龍』原道篇の「闢詩緯頌、斧藻群言」もこれにもとづく。

(16) 清辭潤乎金石二句 『宋書』謝靈運傳論に、「英辭潤、金石、高義薄雲天」とあるのに據ったもの。「清辭」も同論に、「雖清辭麗曲、時發乎篇、而蕪音累氣、固亦多矣」とある。「精義」は、『易』繫辭下傳に、「精義入神、以致用也」とあり、注に「精義、物理之微者也」という。『文心雕龍』原道篇に、「符采復隱、精義堅深」。

(17) 永嘉以後六句 同旨の指摘は、六朝の文學論に少なくない。『宋書』謝靈運傳論に、「有晉中興、玄風獨扇、爲學窮於柱下、博物止乎七篇、馳聘文辭、義單乎此。自建武暨乎義熙、歷載將百、雖綴響聯辭、波屬雲委、莫不寄言上德、託意玄珠、適遼之辭、無聞焉爾。『文心雕龍』明詩篇に、「江左篇製、溺乎玄風、嗤笑徇務之志、崇盛亡機之談。袁、孫已下、雖各有雕采、而辭趣一揆、莫與爭雄」。同時序篇に、「自中朝貴玄、江左稱盛、因談餘氣、流成文體。是以世極超邁、而辭意夷泰、詩必柱下之旨歸、賦乃漆園之義疏。『詩品』序に、「永嘉時、貴黃老、稍尚虛談。於時篇什、理過其辭、淡乎寡味。爰及江左、微波尙傳。孫綽、許詢、桓、庾諸公詩、皆平典

似道德論、建安風力盡矣。また下品孫綽・許詢等評に、「永嘉以來、清虛在俗。王武子輩、詩貴道家之言。爰逮江表、玄風尙備、眞長・仲祖・桓、庾諸公猶相襲。世稱孫・許、彌善恬淡之詞。なお「平淡」も、中品郭璞評に、「始變永嘉平淡之體」と見えている。

(18) 靈運高致之奇二句 顏(三八四—四五六)・謝(三八五—四三三)を並稱した批評は、『宋書』顏延之傳に、「延之與陳郡謝靈運、俱以詞彩齊名、自潘岳、陸機之後、文士莫及也。江左稱顏・謝焉。同謝靈運傳論に、「爰逮宋氏、顏・謝騰聲。靈運之與會標舉、延年之體裁明密、並方軌前秀、垂範後昆。『南齊書』文學傳論に、「顏・謝竝起、乃各擅奇。『高致』の語で概括される謝の評價は、沈約のいう「與會標舉」の趣きに合致しようし、『詩品』も次の如く靈運の文學に「高」の特質を認めている。「譬猶青松之拔灌木、白玉之映塵沙、未足貶其高潔也」(上品)。一方、「錯綜」を以て評される顔についても、沈約の「體裁明密」や『詩品』の「尙巧似、體裁綺密、情喻淵深、動無虛散、一字一句、皆致意焉」(中品)と一致する面が多からう。「錯綜」は、『易』繫辭上傳の「參伍以變、錯綜其數」に出るが、丹念に整えられた複雑さをここではいう。

(19) 謝玄暉之藻麗二句 謝朓(四六四—四九九)・沈約(四四一—五一三)は、いわゆる「永明體」の創始者として知られる。『南齊書』文學陸厥傳に、「永明末、盛爲文章。吳興沈約・陳

郡謝朓・琅邪王融以氣類相推轂。：約等文皆用宮商、以平上去入爲四聲、以此制韻、不可增減、世呼爲永明體。」「藻麗」は、陸機「文賦」に、「遊文章之林府、嘉麗藻之彬彬」。また劉孝標「廣絕交論」(『文選』卷五十五)では、梁の文人任昉を贊えて、「遒文麗藻、方駕曹・王」と述べ、李善注は「孫綽集序」の「綽文藻適麗」を引く。「富溢」は、『史記』穰公列傳の論に、「及其貴極富溢、一夫開說、身折勢奪而以憂死」、晉・閻續の上疏(『晉書』卷四十八)に豪族の子弟を指して、「如此之輩、生而富溢」と評した例などがあげられる。

(20) 輝煥斌蔚二句 「斌」は「彬」に同じ。陸機「文賦」に、

「頌優遊以彬蔚」。「辭義」は、皇甫謐「三都賦序」(『文選』卷四十五)に、「是以孫卿・屈原之屬、遺文炳然、辭義可觀」。

『文心雕龍』では原道篇の「然後能經緯區宇、彌綸彝憲、發揮事業、彪炳辭義」等の例がある。

(21) 自梁簡文之在東宮至訖于喪亡 梁簡文帝蕭綱(五〇三—五五一)を中心とする文學に關しては、『隋書』文學傳序に更に嚴しい評價が見られる。「梁自大同之後、雅道淪缺、漸乖典則、爭馳新巧。簡文・湘東、啓其淫放、徐陵・庾信、分路揚鱗。其意淺而繁、其文匿而彩、詞尚輕險、情多哀思。格以延陵之聽、蓋亦亡國之音乎」。簡文帝の文學愛好については、『梁書』簡文帝紀に、「雅好題詩、其序云、余七歲有詩癖、長而不倦。然傷於輕豔、當時號曰宮體」、また徐摛傳に、「王入爲皇太子、轉家令、兼掌管記、尋帶領直。摛文體既別、春

隋書經籍志序譯註(代)(興膳・川合)

坊盡學之、宮體之號、自斯而起」とあるのを参照。このほか宮體詩に關する記述は、『梁書』庾肩吾傳、『周書』庾信傳にも見られる。

(22) 清辭巧製二句 徐陵「玉臺新詠序」に、「但往世名篇、當今巧製、分諸麟閣、散在鴻都」とある。「清辭」もこの序の「清・文・滿篋、非惟芍藥之花」のような感じだろう。また注(9)参照。「枉席」は、『莊子』達生篇に、「人之所取異者、枉席之上、飲食之間、而不知爲之戒者、過也」。前出「玉臺新詠序」は、宮體詩の世界がまさに「枉席之間」「閨闈之内」にあることを如實に示している。

(23) 彫琢蔓藻二句 「彫琢」は、嵇康「琴賦」(『文選』卷十八)に、「華繪彫琢、布藻垂文」。「蔓藻」は、左思「吳都賦」(同卷五)に、水鳥の姿を描いて、「彫啄蔓藻、刷盪漪瀾」とあり、劉涓子「海藻之屬」と注する。この「彫啄」は、鳥が餌をついばむさまだが、「彫琢・蔓藻」の句は或いはこれをもじったのかもしれない。「閨闈」は、范曄「後漢書」宦者傳論の次の一節が参考になろう。「鄧后以女主臨政、而萬機殷遠、朝臣國議、無由參斷帷幄、稱制下令、不出房闈之間。不得不委用刑人、寄之國命。手握王爵、口含天憲、非復掖廷永巷之職、閨闈房闈之任也」。

(24) 遞相放習 『宋書』謝靈運傳論に、「王褒・劉向・楊・班・崔・蔡之徒、異軌同奔、遞相師祖」。

(25) 號爲宮體 注(2)参照。

(26) 流宕不已 皇甫謐「三都賦序」に、「祖構之士、雷同影附、流宕忘反、非一時也」とある。また『隋書』文學傳序にも、「周氏吞併梁荆、此風扇於關右、狂簡斐然成俗、流宕忘反、無所取裁」の論がある。

(27) 其中原則兵亂積年二句 この指摘は五胡十六國時代についてのもの。總序(4)に、「其中原則戰爭相尋、干戈是務、文教之盛、苻・姚而已」とあるのを参照。『魏書』文苑傳序に、「永嘉之後、天下分崩、夷狄交馳、文章殄滅」というのも、この時期についての言及である。

(28) 後魏文帝四句 孝文帝拓跋元宏は、在位四七一—四九九。『魏書』文苑傳序の北魏文學に對する評價は次の通りである。「昭成(什翼犍)・太祖(道武帝)之世、南收燕趙、網羅俊乂。逮高祖(孝文帝)馭天、銳情文學、蓋以頡頏漢徹、掩踰曹丕、氣韻高豔、才藻獨構。衣冠仰止、咸慕新風。肅宗(孝明帝)歷位、文雅大盛、學者如牛毛、成者如麟角。孔子曰、才難、不其然乎」。

(29) 未能變俗 類似的表現として、任昉「天監三年策秀才文」(『文選』卷三十六)の「上之化下、草偃風從、惟此虛寡、弗能動俗」、「詩品」序の「然彼衆我寡、未能動俗」をあげておく。

(30) 齊宅漳濱六句 北齊の文學の動向に關するより詳しい記述は、『北齊書』『北史』の文苑傳に見られる。「漳濱」は、漳水のほとり鄰近に都したことをいう。注(3)参照。「高言累句」

は詔敕等の公的な文章を、「清辭雅致」は詩賦等の感覺的な美文を暗に指したものである。『北齊書』文苑傳序で顯彰される人々は、ほとんどが公的文章の書き手として名をあげた文人である。『隋書』文學傳序において、南北文學の特質を對比している一節が、恐らくこの理解を助けよう。「江左宮商發越、貴於清綺、河朔詞義貞剛、重乎氣質。氣質則理勝其詞、清綺則文過其意、理深者便於時用、文華者宜於詠歌、此其南北詞人得失之大較也。若能掇彼清音、簡茲累句、各去所短、合其兩長、則文質斌斌、盡善盡美矣。」「累句」の用例を一つ。『宋書』鮑照傳に、「世祖以照爲中書舍人。上好爲文章、自謂物莫能及、照悟其旨、爲文多鄙言累句、當時咸謂照才盡、實不然也」。

(31) 紛紜洛繹 『詩品』上品謝靈運評に、「麗典新聲、絡繹奔會」とある。

(32) 後周草創六句 北周の文學について、『隋書』文學傳序では梁末の亞流という評價がなされている。注(2)参照。

(33) 我則未暇 張衡「東京賦」(『文選』卷三)に、前漢草創期のことを敘して、「因秦宮室、據其府庫、作洛之制、我則未暇」と見える。

(34) 其後南平漢沔二句 「平漢沔」は、周が宣帝の時代に江北の諸郡を陳から奪ったこと、「定河朔」は、それに先だつ武帝の建德六年(五七七)に北齊を滅ぼしたことをいう。

(35) 訖于有隋六句 多くの文雅の士が集められたことを述べる

『隋書』文學傳の一節を引いておく。「爰自東帝歸秦、逮乎青蓋入洛、四隕咸暨、九州攸同、江漢英靈、燕趙奇俊、並該天網之中、俱爲大國之寶。言刈其楚、片善無遺、潤木圓流、不能十數。才之難也、不其然乎。時之文人、見稱當世、則范陽盧思道・安平李德林・河東薛道衡・趙郡李元操・鉅鹿魏澹・會稽虞世基・河東柳詵・高陽許善心等、或鷹揚河朔、或獨步淮南、俱騁龍光、並驅雲路」。

(36) 采判南之杞梓 『左傳』襄公二十六年に、「聲子通使於晉、還如楚。令尹子木與之語、問晉故焉。且曰、晉大夫與楚孰賢。對曰、晉卿不如楚、其大夫則賢、皆卿材也。如杞梓皮革、自楚往也。雖楚有材、晉實用之」。

(37) 收會稽之箭竹 『爾雅』釋地に、「東南之美者、有會稽之竹、箭焉」とある。

(38) 屬以高祖少文二句 謝靈運『擬魏太子鄴中集詩序』(『文選』卷三十)の、「楚襄王時、有宋玉・唐景・梁孝王時、有鄒・枚・嚴・馬、遊者美矣、而其主不文。漢武帝徐樂諸才、備應對之能、而雄猜多忌、豈獲晤言之適」を意識するか。『隋書』高祖紀贊に、「素無術學、不能盡下」。また煬帝紀に、「又猜忌臣下、無所專任」とあるを参照。

(39) 於是握靈蛇之珠二句 曹植『與楊德祖書』に、「當此之時、人人自謂握靈蛇之珠、家家自謂抱荆山之玉」とあるのによる。

(40) 轉死溝壑之內 『孟子』梁惠王篇下に、「凶年饑歲、君之民老弱、轉乎溝壑、壯者散而之四方者幾千人矣」。また『墨子』

兼愛篇下に、「今歲有瘟疫、萬民多有動苦凍餒、轉死溝壑中者、既已衆矣」という。

(41) 草澤怨刺 『史記』仲尼弟子列傳に、「孔子卒、原憲遂亡在草澤中」。左思『詠史詩』其七『文選』卷二十一に、「英雄有屯邇、由來自古昔、何世無奇才、遺之在草澤」。「怨刺」は、『漢書』禮樂志に、「周道始缺、怨刺之詩起」とある。

經部詩序にも「幽・厲板蕩、怨刺並興」と既出。同注(40)参照。
(42) 古者陳詩觀風 『禮記』王制に、「命大師陳詩、以觀民風」とあり、鄭注に「陳詩、謂采其詩而視之」という。また漢志詩賦略序に、「自孝武立樂府而采歌謠、於是有代趙之謳、秦楚之風、皆感於哀樂、緣事而發、亦可以觀風俗、知薄厚云」。

(43) 關乎盛衰 漢志詩賦略序に、「古者諸侯卿大夫交接鄰國、以微言相感、當揖讓之時、必稱詩以諭其志、蓋以別賢不肖而觀盛衰焉」とある。

(44) 班固有詩賦略二句 漢志詩賦略序の末尾に、「序詩賦爲五種」とある。すなわち第一に屈原賦に始まる二十家三百六十一篇、第二に陸賈賦に始まる二十一家二百七十四篇、第三に孫卿賦に始まる二十五家百三十六篇、第四に客主賦に始まる雜賦十二家二百三十三篇、第五に高祖歌詩に始まる歌詩二十八家三百十四篇である。

(45) 引而伸之 『易』繫辭上傳に、「十有八變而成卦、八卦而小成、引而伸之、觸類而長之、天下之能事畢矣」。

譯注者後記

擔當はこれまで通り、譯が川合、注が興膳である。楚辭序の譯注は、金文京君の草稿を参照した。謝意を表する。

この譯注は、興膳が交付を受けた昭和五十五年度文部省科學研究費補助金による「中世中國における學術文化の研究——『隋書』經籍志を中心として」の研究成果の一端である。